

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：34207

研究種目：挑戦的研究（萌芽）

研究期間：2017～2022

課題番号：17K18497

研究課題名（和文）大和言葉を手掛かりとした日本人の身体名称、および身体観についての研究

研究課題名（英文）Study of original Japanese names of human body and physical concept of the ancient Japanese

研究代表者

野田 亨（Noda, Toru）

びわこリハビリテーション専門職大学・リハビリテーション学部・教授

研究者番号：50156204

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、海外から医学知識がもたらされる以前の古代日本で用いられていたと考えられる身体語彙を過去の文字資料から収集し、解剖学的視点を加え、考察したものである。特に平安、および鎌倉時代に編まれた古辞書の漢字訳の中に多くの大和言葉による身体語彙を認め、収集した。そのような身体語彙には単純な単音節から複音節と変化してゆくような身体語彙の時間的変遷の可能性も推測できた。さらに、髪、爪、唾など、身体に由来する身体派生物に対する古代人の特別な認識についても考察した。それらを11件の学会発表と3編の論文にまとめた。これらの研究成果は日本医学史のみならず古典文学の解釈などの日本語研究に有益なものと思われる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、単に古い身体語彙の収集という成果にとどまらず、それらの語彙の持つ古代日本語の音節上の特徴、置語、擬態語が身体語彙にも表れていたことが明らかになった。また古代日本人の身体観について、身体から分離した物質について特別な認識を有していたことが研究の過程で気づいた。すなわち、毛、爪、唾液等を身体派生物としてまとめ、このような観点から用例を古典文学などで通観すると、それらの由来する個人の分身、あるいは個人の魂を含むものと捉えていたことが明らかとなった。このように本研究は解剖用語上の意義にとどまらず、日本語学、日本における文化人類学などにも関わる重要な成果をもたらしたと思われる。

研究成果の概要（英文）：This project is aimed to collect the names of the body parts in the original Japanese words (the Yamato-Kotoba) before the Chinese culture has been imported to Japan. The ancient Japanese names of human body were mainly collected from several classical dictionaries compiled in the Heian, and Kamakura periods. Among collected words, we recognized that many names of the body parts containing the derived words of one syllable words such as “te” and “a”, indicating the basic names of upper limb and lower limb. We could trace development of the body names from simple words into more complex words along the long history. Moreover, we found the concept of the ancient Japanese to the derives of the body, such as hair, nail, saliva, etc., as the parts of the body with the owner’s soul. All these outcomes of this project were made public through 11 presentations in the academical meetings related to the anatomy and the medical history fields, and also published in 3 papers of journals.

研究分野：解剖学

キーワード：身体語彙 大和言葉 解剖学 古代日本人

### 1. 研究開始当初の背景

人体の構造について、基本となる身体各部の名称については歴史の変遷があり、古来、日本人が用いてきた大和言葉による名称の多くは失われてきている。特に奈良時代前後に万葉仮名で表されていた身体各部の名称は、中世においては圧倒的な中国、朝鮮文化の影響により、また近世では西洋からの欧文による学名からの訳語に置き換えられてきている。つまり、現代の医学における人体各部の名称は、本来の日本語というより、漢方医学で使用されていた漢語を用いて創作された借用語である。ただ日本人はこうした外来語をうまく日本語に取り入れ、その簡便性をうまく活用したと言える。そのような医学用語はますます日常生活に取り入れられ、本来の大和言葉による身体語彙は、使用される機会がすくなくなり、衰退しているように思える。本研究が、研究を開始したきっかけの一つは、学生時代に目にした解剖学の教科書に書かれていた大和言葉による身体語彙の全貌を解剖学の視点から明らかにしたいという発想とこれまでの古典文献における大和言葉による身体語彙の解釈について、文学や歴史学研究者からの解釈は極めて不十分な状況であり、人体解剖学などの医学的見地からの検証を必要としていると思われたからである。そこで本研究課題から、古典作品や資料の解釈に新たな視点を提供できると考えた。

### 2. 研究の目的

本研究は、古代の日本人が用いていた大和言葉による身体語彙を再検討し、古典的文献の解釈に解剖学的見地からより正確な部位や作用に関する情報を提供しようと試みるものである。そしてそれらの先にある最も重要な目標は、古代日本人の身体観についての理解を深めることである。またこの研究は、日本古来の大和言葉由来と考えられる類語が日本各地に残存することから、方言学からの身体表現語の採取、比較、検討も必要となる。このように本研究は医学史、古代の日本語学、方言学、人体解剖学など広範な学問領域を横断する研究であり、その研究成果は幅広い学問分野に貢献できると思われる。

### 3. 研究の方法

古代日本語の身体語彙の収集については、当初、基本資料として倭名類聚抄、古事記、日本書紀等の日本の古典文献を対象としていたが、研究が進展するにつれ、実際には、古代の文字資料における大和言葉による身体語彙の用例が極めて少ないことから、全身に関する身体語彙を収集するためには、平安時代以降の古辞書文学作品を含む文字資料にまで視野を広げる必要が生じた。実際、それによって身体各部について、上肢、下肢、内臓へと研究を進め、多くの大和言葉による身体語彙を収集できた。研究期間を終えるにあたり、大和言葉による身体語彙の記述は、歴史的に見ると、まずは万葉仮名で書かれた古事記や万葉集、正倉院文書に始まり、中国から取り入れた様々な漢語で書かれた書物に関する(各経典、医心方など)注釈書、そして平安から鎌倉にかけて編纂されたいくつもの古辞書に書かれた漢字の仮名注釈などの中を検討するのが効果的であったと思われる。

また研究当初から注目していた方言による身体語彙と古代日本語による身体語彙との関係については、本研究が地方を訪れる機会のあるたびに、地方の図書館などで全国的には知られていない方言図書が存在することを再確認した。そして、これまで収集した方言による身体語彙と古代日本語による身体語彙との比較検討が、現在の残された課題となっている。一般によく知られていることであるが、特に沖縄を含む琉球地方では、古代日本語と関係の深い身体語彙が残っているものの、歴史的な文字資料として残っているものが極めて少なく、方言資料と

対照させて精査すべきであったが、充分検討できなかった。今後、研究を継続してゆくべき課題であると感じている。

#### 4. 研究成果

研究期間内に本研究者が、明らかにした研究成果は、大きく3分野に分けられる。

1. 全身の大和言葉による身体語彙に関するもの
2. 身体派生物に対する古代日本人の認識に関するもの
3. 大和言葉による身体語彙と音節上の特徴 に関するもの

上記の1にあたる大和言葉による身体語彙の収集は、本研究課題の主たるものであり、下記の3編の論文にまとめた。

1. 野田 亨:大和言葉による人体各部の骨の名称について、びわこ健康科学1、18-28、2022
2. 野田 亨:大和言葉による身体表現(膝周辺の言葉)藍野大学紀要 33,13-21,2021
3. Noda, T.:The original Japanese expression (Yamato-kotoba) of human body (the upper extremity) Aino Journal 18, 31-38, 2021

発表論文の内容は、単なる語彙の羅列になりがちであるので、可能な限り解剖学的な図を用いて、多くの読者に身体各部の大和言葉による表現を直感的に理解いただけるように記載した。

また上記、3では、特に欧文による発表を心がけた。この論文の元になったのは、下記の英国での国際解剖学会での発表である。

4. Identification and Preservation of the Original Japanese Expressions (Yamato-kotoba) about Human body (the upper and lower extremities). The 19th International Federation of Associations of Anatomists Congress London, UK

研究対象は、日本の身体古語に関する内容であり、多くの日本人の文系研究者は欧文での論文発表を行っていないように思われる。本研究者は、これまで以前の研究専攻であった細胞学や細胞生物学で研究発表してきた経験があり、欧文での研究発表を行ってきた。本研究者は、研究対象が日本語や日本文化に関係する内容であっても、できるかぎり、国際学会などで研究発表を行うべきであると考えている。実際、J-Stage上で発表した上記1の論文は邦文で書いた論文にもかかわらず、その発表から6ヶ月のアクセス数は702あり、そのうち200弱は海外からのアクセスであり、古代日本の身体語彙についても関心を持つ海外の研究者が一定数あることを示している。改めて日本語や日本に関する研究も欧文で発表してゆくべきであると感じた。

また身体各部の大和言葉による語彙は、下記の学会でも報告した。

5. 大和言葉による身体表現(内臓)第128回日本解剖学会・全国学術集会 2023
6. 正法眼蔵にみる大和言葉による身体名称 第123回日本医史学会 2022
7. 大和言葉による身体表現の研究 (眼、鼻、口)第125回日本解剖学会・全国学術集会 2020
8. 古代日本人の顔面についての表現 - 「かほ」と「おも」第96回日本解剖学会近畿支部学術集会 2020
9. 大和言葉による身体表現の研究(上肢)第124回日本解剖学会・全国学術集会 2019
10. 大和言葉による身体表現の研究(下肢)第123回日本解剖学会・全国学術集会 2018

11. 大和言葉による身体表現の研究-古典文献と方言語彙との関係(下肢)第17回コ・メディカル形態機能学会 2018

上記5の内蔵についての発表内容は、現在、論文執筆中で来月の投稿を予定している。また、上記11の発表では、大和言葉による身体古語と方言との関係に言及した。

さらに古代日本人の身体についての概念に想いを巡らすうちに、古代日本人の身体派生物に対する認識に着目した。人体に由来するものの、身体から離れてゆく髪の毛、爪、唾などについて古代日本人は特別の認識を有していたことがいくつかの古典作品の中に見出すことができた。すなわち、上記のような身体派生物は元々の所有者の分身であり、その魂が身体から分離したのちもそれらに含まれているという認識である。そのような記述は、古事記、日本書紀に認められ、形を変えた表現として、後の今昔物語集や御伽草子の中に認められる。そのような研究内容は下記の学会で発表した。

12. 「唾」に対する古代日本人の認識について 日本医史学会関西支部会2019年秋季学術集会 2019

13. 身体派生物に対する古代日本人の認識について 第18回コ・メディカル形態機能学会 2019

全身の大和言葉による身体語彙を収集、分類する過程で、特に「手」や「足」に多くの派生語と思われる語彙を認めた。「たなひぢ」や「たなひら」などの語彙は分解可能で、「た」+「な」+「ひぢ」=手+の+肘、「た」+「な」+「ひら」=手+の+平、と解釈でき、いずれも手の一部を表していることが明らかである。そこから、手(「て」、あるいは「た」)は、本来、上肢全体を表す単音節の基本語彙であることが推測できる。同様に、「あなうら」や「あなすゑ」は、「あ」+「な」+「うら」、「あ」+「な」+「すゑ」は、それぞれ、足+の+裏や足+の+末を表す語で、足(「あ」)が下肢、あるいは足を表す単音節の基本語彙であったことが推測できる。このように、古代日本語による身体語彙の音節上の特徴と派生語についての検討を行った。さらに古代日本語による身体語彙には、置語、擬態語が身体語彙にも表れていたことを指摘した。その研究内容が下記の14の学会発表であり、内容の一部は、上記、1、2、3の論文にも指摘した。

14. 音節の特徴から見た大和言葉による身体表現 第97回日本解剖学会近畿支部学術集会 2021

このような身体語彙には単純な単音節から複音節と変化してゆくような身体語彙の時間的変遷の可能性も推測できた。このように本研究は解剖用語上の意義にとどまらず、日本語学、日本における文化人類学などにも関わる重要な示唆をあたえるものと思われる。

本研究課題を終えるにあたり、さらに新たな研究課題が芽生え、研究が広がっていくことを感じている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 野田 亨	4. 巻 33
2. 論文標題 大和言葉による身体表現と古代日本人の身体観（膝周辺の古語）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 藍野大学紀要	6. 最初と最後の頁 13-21,
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Toru Noda	4. 巻 18
2. 論文標題 The Original Japanese Expressions (Yamato-kotoba) of Human body (the upper extremity)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Aino Journal	6. 最初と最後の頁 ,31-38,
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野田 亨	4. 巻 1
2. 論文標題 大和言葉による人体各部の骨の名称について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 びわこ健康科学	6. 最初と最後の頁 18-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57434/bjrh.22004	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 正法眼蔵にみる大和言葉による身体名称
3. 学会等名 第123回日本医史学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 大和言葉による身体表現（内臓）
3. 学会等名 第128回日本解剖学会全国学術集会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 首節から見た大和言葉による身体名称
3. 学会等名 日本解剖学会第97回近畿支部会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 古代日本人の顔面についての表現 - 「かほ」と「おも」
3. 学会等名 日本解剖学会近畿支部会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Toru Noda
2. 発表標題 Identification and Preservation of the Original Japanese Expressions (Yamato-kotoba) about Human body (the upper and lower extremities)、
3. 学会等名 The 19th Congress of the International Federation of Association of anatomists、（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 身体派生物に対する古代日本人の認識について
3. 学会等名 第18回コ・メディカル形態機能学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 「唾」に対する古代日本人の認識について
3. 学会等名 日本医史学会関西支部2019年度秋季学術集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 大和言葉による身体語表現の研究（眼、鼻、口）
3. 学会等名 第125回日本解剖学会全国集会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 大和言葉による身体表現の研究-古典文献と身体方言語彙との関係（下肢）
3. 学会等名 第17回コ・メディカル形態機能学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 大和言葉による身体語表現の研究（上肢）
3. 学会等名 第124回日本解剖学会全国集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 野田 亨
2. 発表標題 大和言葉による身体語表現の研究（下肢）
3. 学会等名 第123回 日本解剖学会全国集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関